

神奈川県におけるハクビシンの生息状況と 同種の日本における由来について

中村一恵・石原龍雄・坂本堅五・山口佳秀

Kazue NAKAMURA, Tatuō ISHIHARA, Kengo SAKAMOTO and Yoshihide YAMAGUCHI:
Occurrence Records of Introduced Masked Palm Civet (*Paguma larvata*)
in Kanagawa Prefecture, with Notes on the Origin of the Species in Japan

はじめに

ハクビシンは原始的な形質を留める食肉目ジャコウネコ科に分類され、*Paguma* の属が与えられる動物であり、単一種 *Paguma larvata* とされている。インド、ネパール、チベット、中国（北は河北省まで）、台湾、海南島、ビルマ、タイ、西マレーシア、スマトラ、北ボルネオ、南アングマン諸島に分布する（今泉, 1988）。日本にもいるが、古くからいたとする自然分布説と国外から人為的に持ち込まれたとする帰化説とに分かれている。

日本における分布は本州、四国であり、新聞報道（1985年2月9日付朝日新聞）によると、北海道の奥尻島にも生息しているようである。1984年12月13日に奥尻島東部の長浜海岸で死体が発見されたという。九州からの発見はまだないようである。

現在の分布は大きくは東北地方、関東・中部地方、四国地方の3地域に分けられる（Asahi, 1985; 中村, 未発表）。近畿地方および中国地方からの報告例はない。東北地方は、宮城、山形、福島に3県に分布し、鳥海隼夫氏（1988年私信）によると、近年、秋田県南部へ進出したとのことである。関東地方では、茨城、栃木、群馬、埼玉、東京、神奈川の1都5県で生息が確認されているが、千葉からの報告例はないようである。中部地方では、山梨、長野、岐阜、静岡、愛知の5県に分布し、近年、新潟（風間, 1987）、富山（南部久男氏1988私信による）、石川、福井（以上水野, 1983）にも進出し、全県から記録されるに至っている。四国では、徳島、香川、愛媛、高知の全県に広く分布する。

鳥居（1982）は分布県として三重県をあげ、水野（1983）も、鳥居春巳氏の資料によると明記して分布図を示し、その中で三重県の位置に1981年の矢印を入

れて生息を示唆している。今後、愛知県からの進出があることは十分予測されるが、しかしながら、三重県立博物館の富田靖男氏の教示（1988）によると、現在、三重県からの確実な記録はないとのことである。

以上のように日本のハクビシンは3グループに分けられる（cf. Asahi, 1985, fig. 2）。今後、分布を広げていけば、群馬や長野の山地帯あたりで東北グループと中部グループとが出合うことになろうが、現在は関東平野を挟んで2つのグループは隔絶されている。千葉からの報告例のないことは関東平野が分布を広げるうえで障害となっていると考えることで説明がつく。

日本のハクビシンは東北、中部、四国の3地域に不連続に分布するということであり、このことはこの動物が土着種か帰化種かを判断する際の重要なポイントの一つとなる。

これまでみてきたように、本州の各地でハクビシンは現在活発に分布を拡大させている。ここに報告する神奈川の現況もそうした動きの一環として捉えることができる。以下に県下におけるハクビシンの捕獲記録（その多くは保護による）を収集した結果を報告する。県立自然保護センターに保護された記録は坂本によって、箱根・小田原・湯河原については石原によって収集され、記録全般のとりまとめを中村と山口が行なった。日本産ハクビシンの由来については中村の見解を述べた。

目撃記録を若干加えたが、その場合、筆者らが実際に目撃したもの、記録写真のあるものに限定した。情報を集める過程でタヌキをハクビシンと誤認している例が幾つか見受けられたことによる処置である。アンケート調査（本県に関するものとしては、塩沢ほか, 1984と野生動物保護管理事務所, 1988の報告がある）を行なう場合、この点にとくに注意を払う必要がある

ように思われる。

神奈川県における捕獲状況

神奈川県におけるハクビシンの記録は1958年12月に山北町大又沢で幼獣が捕獲され、今泉ら（1964）によって確認されたのが最初である。その後、1963年4月に丹沢で傷を負った1頭が保護され、横浜市野毛山動物園に収容された。2年後の1965年1月には再び丹沢で捕獲された。この時は3頭で場所は同じ山北町世附山女沢である（神奈川県立博物館標本KPM607-17, 607-18, 607-19）。次いで、1969年2月にも同じ山北町世附で1頭捕獲された（KPM607-664）。1977年2月には東丹沢の札掛で若い個体が保護されている（無記名, 1977）。さらに1981年2月には、札掛より東に位置する清川村宮ヶ瀬で死体が拾得された（KPM607-1649）。

県下でハクビシンが目立つようになったのは1980年頃からである。県立自然保護センターでは、1980年までは持ち込まれることのなかったハクビシンが、81年に松田町で保護されたのをかわきりにして、それ以後毎年届けられるようになった（表1）。1988年12月までの8年間に34件37頭が保護されている。保護場所の内訳は、厚木市10件、二宮町4件、相模原市3件、城山町3件、秦野市2件、松田町2件、山北町2件、大磯町2件、清川村2件、開成町・大井町・平塚市・南足柄市・座間市各1件で、保護件数は年々増加の傾向にある（図1）。期を同じくして1980年頃から箱根・小田原地区においても、その存在が交通事故死という形で目立つようになった（表2）。これ以前の箱根からの記録として、「箱根宮ノ下、澤田乾」とだけ記述された田代（1969）による報告がある。

以上の記録を総合して現在の分布を描くと図3のよ

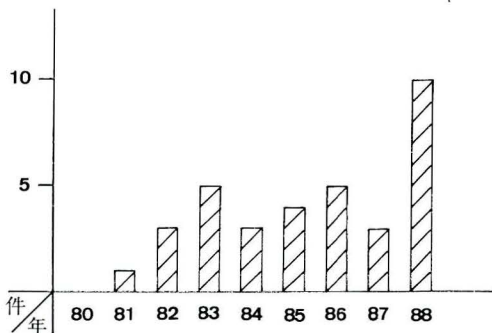


図1. 保護件数の推移（県立自然保護センターの資料による）

うになる。

最初の記録は西丹沢を中心とした地域から得られていることから、本県へはまず西部の山地へ進入し、1960-65年ごろの分布域は丹沢のような山地に限られ、かつ個体数は少なかったと考えられる。隣接する静岡県では発見後20年経過した1965年に急激に増加したが、1965-66年の分布は伊豆半島西部および南部の海岸沿いの地方で、その後、御殿場方面へ北上する形で広がっていったことが、古屋（1973）の調査で明らかにされている。山梨からは、宇田川（1951）、中村（1957）による報告例があるように、比較的早くから生息の認められていた県であるが、その後の分布域は、飯室（1975）の調査によると、富士川流域に沿って南北に生息する形で、分布に県西部への片寄りがある。これらの報告をもとに判断するならば、神奈川県への最初の進出は静岡側から行われたとみるべきであろう。捕獲記録としては最初のものが静岡との県境金時山山頂で得られている（図3）ことから、箱根への進出も同様に静岡側からであろうが、西丹沢とは独立に行なわれたと考えられる。前記したような静岡での動きや、田代（1969）による箱根の最初の報告などから推定して、箱根への進入は1965年以降であろう。関東各地への進出は、神奈川同様、主として1960年代以降の比較的近年のことであり（御野, 1972；川上, 1975；小山, 1982；鈴木・小林, 1987；金井, 1985）、東北および中部地方からの分布拡大によるものと思われる。

神奈川においては、静岡同様、発見後およそ20年経過して増加期を迎えているが、静岡との大きな違いは、20年のずれが認められる点である（図4）。静岡で飽和状態に達し、神奈川へ分布を波及させ、そこで再び増加期を迎えたと見ることで説明がつく。以下に



図2. 箱根からの確実な最初の記録と思われるハクビシンの標本（個人所有）。箱根金時山, 1973. 3. 16採集（写真：石原龍雄）

表1. ハクビシン保護状況(1981年～88年県立自然保護センターで傷病鳥獣として保護されたもの)

保護年月日	保護場所	保護場所の状況	頭数	性	年令	保護理由	保護後の状況
81. 8. 24	松田町 寄	山林	1	不明	亜成獣	トラバサミにかかっていたものを保護。	野毛山へ 8/26
82. 4. 6	厚木市棚沢	不明	1	♂	成 獣	捕獲し、飼育していたものを日本生物教材センターへ届けた。	〃 4/ 6
4. 14	山北町平山	山林	1	♀	亜成獣	トラバサミにかかっていたものを保護。(82. 2 に保護)	〃 7/17
10. 15	清川村煤ヶ谷	物置の屋根裏	2	不明	幼 獣	物置を取り壊したところ屋根裏から親が飛び出し、幼獣2頭がいた。	〃 10/15
83. 6. 9	開成町吉田島	畑	1	〃	成 獣	腰(足のつけ根)にケガ。	死亡 6/10
6. 16	厚木市七沢	道路	1	〃	〃	車にぶつかり骨折。	〃 6/18
7. 11	厚木市恩名	物置の中	1	〃	〃	自宅の物置の中で動けなくなっているのを保護。	〃 7/12
9. 24	秦野市菩提	会社の工場内	1	〃	〃	工場の作業場に入り、ケガをする。	〃 9/25
12. 13	二宮町	不明	1	〃	〃	弱っているのを保護。	放獣 12/20
84. 5. 29	城山町明音寺	相模川川原	1	♀	〃	足を引きずり弱っているのを保護。	死亡 5/30
6. 19	秦野市	道路	1	不明	亜成獣	道にいるのを子供が捕まえ、飼育していた。	野毛山へ 6/26
11. 21	南足柄市塚原	道路	1	♂	幼 獣	道にいるのを保護。	放獣 12/13
85. 3. 5	相模原市田名	会社の工場内	1	不明	成 獣	工場内に迷い込んだものを保護。	〃 3/27
7. 18	二宮町中里	不明	1	♂	〃	弱っているものを保護。	野毛山へ 7/23
7. 28	厚木市中町	街中	1	♀	〃	飼育していたものが逃げ出したものと思われる。	放獣 7/31
8. 23	二宮町二宮	不明	1	不明	〃	傷ついて弱っているのを保護。	死亡 8/24
86. 6. 4	大井町金子	住宅の庭先	1	♂	〃	不明	〃 6/ 8
6. 5	厚木市不川入	田んぼ	1	♀	〃	カラスに片目をつぶされ田んぼに落ちて弱れそうなのを保護。	〃 6/ 6
7. 1	相模原市田名	会社の工場内	1	不明	幼 獣	工場内の材木の隅で弱っているところを保護。	放獣 9/19
7. 22	厚木市飯山	不明	1	〃	成 獣	傷ついて衰弱しているものを保護。	死亡 7/23
11. 5	厚木市温水	住宅の庭先	1	〃	幼 獣	住宅の庭に迷い込んできたものを保護。	放獣 12/11
87. 1. 21	城山町川尻	道路	1	〃	〃	道路にうずくまっていたのを保護。	死亡 1/24
5. 15	相模原市田名	工場内の排水溝	1	〃	成 獣	排水溝にうずくまっていたものを保護。	放獣 5/18
12. 19	厚木市温水	大学校内	3	〃	幼 獣	裏山が工事のためか、逃げて来たものを保護。	野毛山へ 12/24
88. 1. 29	平塚市南金目	不明	1	〃	成 獣	傷ついて動けないでいたものを保護。	死亡 1/30
2. 9	座間市座間公園	公園内	1	〃	〃	幼獣で保護し、しばらく飼育していたもの。	放獣 2/21
2. 18	大磯町高麗山	山林	1	♂	〃	犬に追いかけられケガをしたものを保護。	〃 2/18
7. 11	城山町川尻	建物の敷地内	1	不明	〃	弱っているのを保護。	〃 7/30
8. 1	松田町	山林	1	〃	幼 獣	親とはぐれた幼獣を保護。	〃 10/ 7
8. 7	大磯町黒岩	不明	1	〃	〃	左前肢事故で切断。	〃 10/ 7
9. 18	厚木市三田	不明	1	♂	成 獣	弱っているのを保護。	死亡 9/19
11. 28	清川村煤ヶ谷	住宅の庭	1	不明	〃	垣根にぶらさがっているのを保護。	放獣 12/ 2
11. 29	山北町向原	河原	1	♂	〃	河原でうずくまっているのを保護。	死亡 12/ 1
12. 2	厚木市七沢森林公園	山林	1	♀	〃	林の中でうずくまっているのを保護。フラフラしていた。	〃 12/ 3

表 2. 箱根・小田原・湯河原・真鶴地区におけるハクビシンの記録状況

年月日	場 所 (数字は標高)	備 考 お よ び 観 察 記 録	性・測定値 (mm.)
73. 3. 16	箱根町仙石原金時山1200m	ゴミ焼却用ドラム缶の中で死亡していた。標本は個人所有(図2)。	
79. 10. 9	箱根町仙石原水士野 580 m	交通事故死。	
79. 晩秋 か初冬	箱根町強羅	ダストバケットに入っていたところを捕獲された。この中に入っていた状態で、干柿、ミカンを与えると1 m位の目の前ですぐに食べ始める。それ以上近づくと、カーツと威嚇するが、離れるとまたパクパク食べる。	
80/81	小田原湯本カントリークラブ	中毒死(農薬?)。大涌谷自然科学館標本	
83. 9. 19	箱根町二ノ平車沢 660 m	箱根小涌園ひばり館の渓谷露天風呂元湯付近で保護されたが、死亡。解剖の結果、腰の骨が折れており、交通事故死と推定された。	
84. 4. 22	湯河原町広河原 500 m	湯河原パークウェイ道路上で交通事故死	メス, 頭胴長410, 尾長315
84. 7. 19	真鶴半島	林内の路上を歩いていたものが捕獲され、小田原市動物園に保護される(相模新聞1984年7月20日付)。写真から推定して幼獣と思われる。	
84. 7. 24	箱根町大井平 620 m	国道138号線で交通事故死。	
86. 11. 11	南足柄市怒田あさひ観音道裏	交通事故死。11.9頃死亡したらしい。	頭胴長約450, 尾長約350
87. 1. 16	箱根町宮城野	体毛が著しく脱毛し、胴の皮膚が透けて見える。頭部の毛もかなり少なく、鼻から頭にかけての白帯がはっきりしていない。老獣か?。干柿、焼いた鮭、リンゴ、ミカン等を与えるとすぐに食べ始め、きれいにたいらげてしまう。1.18に保護された場所にもどすが、こぼれ落ちたリンゴに執着して離れない。近所の人話では他に2頭いて3頭で来ていたらしい。86年に近くの国道138号線で交通事故死したものがあったという。	
88. 1. 2	箱根町二ノ平	成獣が迷い込む。胴の前半が脱毛し、皮膚にカサブタができ、皮膚が肥厚したように見える。ローストチキンを目の前で食べる。	
88. 1. 24	箱根町仙石原品ノ木 660 m	国道138号線で交通事故死。87年からゴルフ場に出没すると言われていた。	オス, 頭胴長525, 尾長398 体重3.5kg
88. 1. 26	箱根町湯本早雲公園	メスとおぼしき個体が箱根湯本小学校職員角田昌司氏によって撮影された。	
88. 5. 13	箱根町大平台 335 m	国道1号線で交通事故死。	メス, 頭胴長506, 尾長403 体重2.55kg
88. 12. 7	小田原市南町	会社員が飼っているハトやコイを狙うノラネコを捕獲するために自宅に仕掛けたトラップにかかる(88.12.8付神奈川新聞・神静民報による)。	

したハクビシンが捕獲されている。飼いネコのために少しだけ開けておいた窓から何度か侵入していたらしく、ネコの餌が全部なくなっており、室内には泥のついた足跡が残されていたという（神奈川新聞1988年2月8日付による）。人家に営巣するものが始まったことも注目に値しよう。清川村の例では物置を取り壊したところ、屋根裏から親が飛び出し、中にいた幼獣2頭が保護されている（表1参照）。また、中山和也氏によると、1988年春に大磯町西小磯の国道1号線沿いにある空家に営巣したとのことである。

静岡では、まずある地域で生息密度が急速に高くなって、つぎにその周辺に分布を拡大させ、最初に密度の高かった地域の密度はやがて低くなって安定するという過程が認められている（古屋，1976）。このことは、分布を拡大させながらも、個体群が全体に安定期に向かっていることを示唆しているものと思われ、古屋（1973）や鳥居（1980）によって示されたように、分布もほぼ県内全域を占めるに至っている。

ハクビシンによる農作物の被害が各地で問題となっているが、個体群の増減によって被害の程度が変動し、個体群が安定期を迎えるにつれて被害は少なくなっている（古屋，1976）。このことは注目に値する。ハクビシンばかりでなく、有害駆除を目的とした野生動物のコントロールは、この点を十分留意し、個体群増加の背景を生態学上の手法を用いて多面的に把握し、そのうえでなされるべきことだと思う。

日本産ハクビシンの由来について

日本における確実なハクビシンの最初の記録（標本による記録という意味での）は、1943年12月に静岡県浜名郡波田村での捕獲例（那波，1965）ということになっているが、これより古い記録がある。立石（1969）が「香川生物4号」に発表したのがそれで、香川郡塩江町の大滝山で昭和1，2年（1936-37）頃、塩江町在住の市原一（明治27年生まれ）がメス1頭を捕獲し、その毛皮は襟巻として保存されている（立石，1974）。立石が示す、市原が手にした毛皮の写真は確かにハクビシンのものである。これ以前の確実な記録は見当なかったが、明治以前にも生息していたと主張する人もいる。例えば、御厨（1978）である。江戸期の「類聚名物考」所載の雷獣図なるものがハクビシンを示すものだとし、すでに江戸時代には生息していたのではないかと推定している。しかし岡田（1981）によれば、江戸時代には雷獣の存在が広く信じられ、そ

の記事も諸書に見られ、またその獣の姿も描かれているが、雷獣と信じられていた動物はテンをイメージして描かれたものであるかもしれない。

今泉（1977）は、頭骨や顔の斑紋などの分類・形態学的な特徴が国外産のいずれの地域のもの（10数亜種知られる）にも該当しないとして、帰化種とする説に異議を唱えている。しかしながら、以下に述べるような調査事例や俗称、前記したような分布の不連続性および近年の著しい分布変動等に基づいて判断するならば、日本のハクビシンは在来種ではなく、帰化種とみなすのが妥当と思われる。

鳥海（1983）の聞き込み調査によると、福島市西部の山間部（庭坂というところ）では戦前ハクビシンが養殖の対象とされていた。それによると、「戦前、軍に納入するためタヌキを養殖していた。また動物商より台湾タヌキと称する動物を買ったことがある。だが毛皮が粗悪で売っても値段が安いし、エサも思うように手に入らないので管理が不十分になって逃げられたり、また裏山に放したりした」。

これは重要な証言であると思う。なぜなら、これに似た状況が各地からいくつも報告されているからである。戦前静岡県清水市ではタヌキの養殖業者によってハクビシンも相当数飼育されていたということが、聞き込み調査をした那波（1965）によって述べられている。また、清水（1961）は、「愛媛の動物」の中につぎのような記事をのせている。「昭和13年頃、毛皮需要の増加に伴って日本中でタヌキの飼育が盛んになり、戦時中のこととて毛皮の不足している際でもあり、台湾タヌキの異名のあるハクビシンを動物園飼育用以外に沢山移入した。それが終戦の飼料難のため山野に放たれ、それが野生化するようになった。その人自身も高松市のK氏に4頭送った」と、このように書いている。徳島の記録を報告した阿部（1965）は、「北大の犬飼博士によると、戦前業者がハクモテンという名前で毛皮獣として台湾から移入して広めたものらしい」と書いている。輸入毛皮獣に詳しい鳥類学者小林桂助氏（1988私信）によると、戦前業者がタヌキ飼育熱につけ込み、毛皮獣として有望というふれこみで農家に売り込んだが、毛皮としてはまったく商品化されなかったという。

ハクビシンには「ハクモウテン」とか「ハクモウセン」とかの呼び名があり、これらは明らかに「ハクビシン」のなまりであるという（朝日，1986）。そうだろうか。毛皮獣として輸入されて売り込まれたのであ

れば、体型がテンとは大きくかけ離れてはいないこと、顔に白斑があることなどから、「白毛のある貂」すなわち「白毛貂」と称し、ハクモウテンまたはハクモテン（ハクモウセンはこれのなまりであろう）の名で業者が配布した可能性の方が大きいと思う。

ハクビシンは「白鼻芯」と綴られる台湾名であり、中国名では「花面狸」である。ハクビシンという呼び名は、すでに大正14年刊の「哺乳動物図解」（岸田久吉著、日本鳥学会発行）に出てくるが、その後発行された「日本動物図鑑」（昭和2年刊、内田清之助ほか著、北隆館）、「応用動物図鑑」（昭和5年刊、内田清之助ほか著、北隆館）、「博物辞典」（昭和7年刊、伊藤武夫編、弘道閣）、さらには「内外普通脊椎動物誌」（昭和10年刊、秋山蓮三著、受験研究社）にもハクビシンは登場していない。当時ハクビシンという動物自体あまり日本に紹介されず普及してはいなかったことが伺える。このことからハクモウテンとかハクモテンという呼称は、ハクビシンという現在の名とは独立に新しく生み出されたものと想像される。

19世紀末から毛皮獣の養殖ブームが世界的に起きたが、日本でも大正末の1920年頃からキツネとタヌキの養殖が始まり、昭和初期の1930年頃には北海道のタヌキが本州各地へ移入された。その毛皮が本州産のものより良質だとされたからである（朝日、1983）。昭和初期（6～7年頃）は、農林省がタヌキの養殖を奨励した時期であるが、これは、犬飼（1973）によると、冷害の続いた東北地方を救済するためであったとのことである。しかし種となるタヌキの値段が高かったため、農林省は岩手県にタヌキの養殖場を作り、種狸を東北六県に配布したという。また、内田（1930）によると、イタチほどではなかったが、当時タヌキの毛皮は欧米における需要の増加に伴い、価格は漸次高騰していた。こうしてみると、戦前に外貨獲得あるいは救荒用として、また軍用としても、毛皮獣とくにタヌキの養殖が全国的な規模で行なわれたと判断される。

一般にジャコウネコ科の毛質は粗悪であり、あまり重要な毛皮獣ではない（寺田、1977）。にもかかわらず業者がハクビシンを用いたのは、種動物の需要に応じるためであったと考えられ、タヌキに代わるものとしてこれを輸入し、配布の際、毛皮獣として優れたタヌキやテンの名をもじり、時には台湾狸、時には白毛貂と称して農家に売りつけたのであろう。おそらく価格はタヌキよりずっと安かったにちがいない。

東南アジアから船員によって（ペットとして）運ば

れ、それが放たれたり逃げられたりして野生化するようになったとする見方がある（ASAHI, 1985）。日本における分布が東北、関東・中部、四国の3地域に大きく分けられ、各々の地域の太平洋岸に遠洋漁業の基地（石巻、清水、高知を指しているらしい）が含まれていることに着目した説のようであるが、今一つ説得力に欠ける。

日本産ハクビシンの顔の斑紋にはかなりの変異があり、一つの地方で捕獲されたものの中にもそれが認められることから、古屋（1976）は、一地方に原産地の異なる個体が入り交じっている可能性のあることを示唆している（古屋は帰化説をとっている。古屋、1971も参照）。仮にそうだとすれば、亜種間での交雑による形質の新たな表現型もあり得るであろう。しかし、必ずしも交雑があったと考える必要はなく、ライト効果（遺伝子浮動）を想定しての説明も可能である。帰化種であれば最初の野生化は一つがいか、せいぜい数頭から始まったであろうから、このような小集団においては、なんらの適応値ももたない突然変異が生き残り、特定の集団全体に広がることが可能である。突然変異によって生じた偶然の変異はさらに多くの中間的な突然変異を生み、これが集団内に固定されることは十分考えられるだろう。

国外産との形態上の特徴が亜種レベルで合致しないことを理由に、帰化種ではないと判断することに慎重であらねばならず、むしろ、哺乳類と鳥類の進化のスピードは異なるであろうが、つぎのような事例があることに留意する必要があるだろう。JohnstonとSelanderによると、ヨーロッパから北アメリカに人為的に持ち込まれたイエスズメが、移入後100年にもならないのに、少なくとも表現型としては、大陸内のある程度の地理的変異が認められるまでに変化している。それが突然変異と自然淘汰によって生じたことを証明するものではないが、予想を超える出来事である（浦本、1977）。

出産期など生理的な面でも変化しているのではないかという、日本平動物園の三宅隆氏の興味深い観察がある。同動物園に保護される個体は、1960年代末から70年にかけては9月～12月産まれ（秋仔）が主体であったが、近年は4月～5月産まれ（春仔）が増えているという（鳥居、1980）。神奈川においても、例数が少なく、はっきりしたことは言えないが、1985年頃までは10月～1月の秋冬期にのみ保護されていた幼獣が、85年以降は7月～8月にも保護されるようになった。

ている（表1参照）。

全てではないが多くの帰化動物は、潜伏期、爆発的増加期、安定期の3段階をたどって新天地に定着することが多い（宮下，1978）。ハクビシンもこうした経過をたどっている。

ハクビシンが養殖用として日本に持ち込まれたのは、1930年代頃である可能性が高い。東北、中部、四国の各地方ごとに何カ所かにわたって別個に移入されたであろう。そうでなければ、現在の分布の不連続性を説明することは難しい。

飼育されていたものが逃亡したり、放たれたりするケースが多かったのは戦時中ないしは終戦時であったと考えられるから、野生化は1940年から45年にかけて行なわれたと推定される。その存在があまり目立たない潜伏期を経て、1960年代になって著しい増加期を迎え、周囲への分布拡大を開始したと考えられる。筆者らの考えによれば、日本のハクビシンは移入後約50年を経過したことになり、よほどのことがないかぎり、いずれは安定期を迎え、日本に定着できることになるものと思われる。形態や生理・生態の面で国外のものとは多少なりとも変化をとげている可能性もある。今後の調査が期待される。

人里動物としての地位を確保できたり、そこに棲みつくことのできそうなのが、原始的な形質を留め、雑食性という共通点をもつタヌキやハクビシンのような動物であるのは興味深いことである。

ま と め

捕獲記録および目撃記録に基づき、神奈川県におけるハクビシンの生息状況を述べ、あわせて日本産ハクビシンの由来について考察した。得られた主な結果は次の通りである。

1. 1960-65年頃の分布は丹沢などの山地に限られていたが、西丹沢での発見後約20年経過した1980年頃からその存在が目立つようになり、現在では相模川以西の県西部域に広範囲に分布するに至っている（図3）。隣接する静岡県側から進入し、潜伏期を山地で過ごし、静岡とは約20年遅れて急激な増加期を迎え、人里に進出したと考えられる。
2. ハクビシンは戦前にタヌキに代わる毛皮獣として輸入され、その際、毛皮獣として優れていたタヌキやテンの名をもじり、台湾狸とか白毛貂と称して農家に養殖用として売り込まれた。しかし毛皮として商品化されることなく、戦時中ないし終戦時に飼育難となっ

て放たれたり逃げだして野生化するに至ったと考えられる。

3. 日本における野生化は1940年から45年にかけて行なわれたと推定され、その存在があまり目立たない潜伏期を経て、1960年代になって著しい増加期が到来し、周囲への分布拡大を開始した。いずれは安定期を迎えるであろうが、静岡と神奈川の比較（図4）にみたように、増加期にあるか安定期にあるかは地域によって異なっている。日本各地における地方・地域ごとに潜伏期—増加期—安定期という変動を繰り返しながら、全体としてはさらに分布を拡大させていくものと予測される。

謝 辞

文献・情報を集めるにあたり、次下の方々のご協力をいただいた。衷心より御礼申し上げます（敬称略・ABC順）。

新井一政（神奈川県立博物館）・有馬征二（神奈川県自然保護課）・一寸木肇（南足柄市向田小学校）・槐真之（大磯町郷土資料館）・古内昭五郎（神奈川県自然保護センター）・古屋義男（高知女子大学）・林尚子（日本野生生物研究センター）・浜口哲一（平塚市博物館）・林公義（横須賀市自然博物館）・角田昌司（箱根湯本小学校）・小林桂助（神戸市）・風間辰夫（新潟県環境保全課）・中山和也（大磯町）・南部久男（富山市科学文化センター）・那波昭義（大日本獺友会）・沼田美幸（神奈川県自然保護センター）・大坂豊（横浜市野毛山動物園）・立石清（香川県）・富田靖男（三重県立博物館）・鳥居春巳（静岡県林業技術センター）・鳥海隼夫（米沢市）・辻内英雄（箱根町）・横山隆一（日本自然保護協会）・吉村信紀（名古屋市）

文 献

- 阿部近一，1965. 帰化獣ハクビシン. 上村 登編，南四国の自然. 44. 六月社.
- 朝日 稔，1983. 日本で分布を広げた哺乳類. 動物と自然, 13(10): 2-8.
- ASAHI, M. 1985. Dispersion of mammals introduced to Japan. Contemporary Mammalogy in China and Japan edited by T. Kawamichi, 142-145. Mamm. Soc. Jpn.
- 朝日 稔，1986. ヌートリアとハクビシン. 遺伝. 40 (1): 18-21.
- 古屋義男，1971. 石鎚山のハクビシンについて. JIBP

- CT, 255-262.
- 古屋義男, 1976. 静岡県のハクビシン, 1. 県内の分布. 哺乳動物学雑誌, 5: 199-205.
- 古屋義男, 1976. ハクビシン. 四手井綱英・川村俊蔵編, 追われる「けもの」たち. 42-59. 築地書館.
- 飯室淳雄, 1975. ほ乳類の概況. 中村司編, 山梨県の野生動物, 9-49. 山梨県自然保護課.
- 今泉吉典・吉行端子・小原 徹, 1964. 丹沢山塊の小哺乳類. 丹沢・大山 学術調査報告書, 343-349. 神奈川県.
- 今泉吉典, 1977. ハクビシン, 帰化種か在来種か. アニマ, (54): 48.
- 今泉吉典 (監修), 1988. 世界哺乳類和名辞典. 平凡社.
- 犬飼哲夫, 1973. わが動物記. 暮らしの手帖社.
- 金井郁夫, 1985. 東京に生きる野生動物たち. らくだ出版.
- 川上千尋, 1975. 県北の哺乳類. 茨城の生物第一集, 170. 茨城県高等学校教育研究会生物部.
- 小山 宏, 1982. 群馬県下のハクビシン. 鳥獣行政, 17(3): 9-18.
- 風間辰夫, 1987. 生息地を拡大しつつあるハクビシン, 新潟県の例, 狩猟界, 31(9): 30-33.
- 御厨正治, 1972. 獣類. 栃木県の動植物編集委員会編, 栃木県の動物と植物, 174-223.
- 御厨正治, 1978. 栃木県産獣類雑記. 哺乳動物雑誌, 7: 160-163.
- 水野昭憲, 1983. 石川県にもいたハクビシン. はくさん, 11(4): 14-15.
- 無 記 名, 1977. ハクビシン. 丹沢だより, (91): 12.
- 宮下和喜, 1978. 外来魚と生物相の攪乱. 淡水魚, (4): 48-51.
- 中村幸雄, 1957. 山梨県産ハクビシンについて (第一報), 鳥獣集報, 16(1): 93-94.
- 那波昭義, 1965. 静岡県下のハクビシンについて. 哺乳動物雑誌, 2: 99-105.
- 岡田章雄, 1981. 日本史小百科動物. 近藤出版社.
- 清水栄盛, 1961. 愛媛の動物. 松菊堂.
- 塩沢徳夫・坂本堅五・伊藤正宏, 1984. 神奈川県における中型哺乳類3種 (タヌキ・キツネ・ハクビシン) の生息状況について. 神奈川県立自然保護センター研究報告, (1): 21-32.
- 鈴木欣司・小林悦子, 1978. 埼玉県のハクビシンの現状 (追補). 著者発行.
- 田代道弥, 1969. 神奈川県西部地方産鳥獣類目録. 神奈川県足柄下地方事務所.
- 立石 清, 1969. 香川県大滝山で捕獲されたハクビシン. 香川生物, (4): 5.
- 立石 清, 1974. 大滝山のハクビシン. 氏家由三編, 香川の動植物, 10-11. 高松市役所.
- 寺田周史, 1977. 毛皮, その種類と背景. 舟著舎.
- 鳥居春巳, 1980. 静岡県のハクビシン. 静岡県猟友会会報, (33): 14-18.
- 鳥居春巳, 1982. ハクビシン. 由井正敏ほか著, 鳥獣害の防ぎ方, 329-335. 農山漁村文化協会.
- 鳥海隼夫, 1983. 生出地不明のハクビシン. 月刊「おいたま」11月号.
- 内田清之助ほか, 1930. 応用動物図鑑, 37-41. 北隆館.
- 宇田川龍男, 1952. 甲斐地区のハクビシンに就いて. 日本哺乳動物学会報, (13): 116-117.
- 浦本昌紀, 1977. イエズメの変異について. 今西錦司著「ダーウィン論」所載, 154-158. 中公新書.
- 野生生物管理事務所, 1988. ハクビシン生息実態調査報告書.
- (中村一恵: 神奈川県立博物館・石原龍雄: 大涌谷自然科学館・坂本堅五: 神奈川県蚕業センター・山口佳秀: 神奈川県立博物館)